

今年の教区の目標

ゆいまーるの心で
あらゆる絆を深めよう！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2

カトリック那覇教区本部

TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バートン司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2021年4月1日 (毎月1日発行)

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第749号 (4月号)



人間の尊厳と聖性

カトリック那覇教区長 ウェイン・バートン司教

兄弟姉妹の皆さん

ご復活、おめでとうございます。

特に今年の復活祭で洗礼を受けた皆さん、おめでとうございます。新しい兄弟姉妹を迎えることで那覇教区の共同体がさらに豊かになります。心からお慶びを申し上げます。

ところで復活について考える時、「体の復活」という信仰宣言の一部を深く理解する必要があります。女子パウロ会 of the Web サイト「カテキズムを読もう」というシリーズによると「人は死んでその霊魂は、神のもとに行き、その人の肉体に結び合わされる日を待つのです。神はご自分の全能の力によって、イエスの復活の力によって、私たちの肉体に不滅のいのちをとりもどしてください。すなわち、世の終わりの時、私たちは復活されたイエス様のようにならねばならないのです。」

「イエスの復活された様子を聖書から見てみると、イエスの復活を信じられなかったトマスに『わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ』とおっしゃいました。トマスに示されたイエスのからだは、十字架に付けられた傷跡のある体で復活されたということです。」

このように、イエスにおいて、

私たちすべての人間は、現在のからだで復活するのですが、このからだに栄光ある『霊のからだ』に変えられるのです。この『復活の方法』は、私たち人間の理解を超えており、信仰によってしか把握できない事柄です。しかし、私たちは、ミサに参加し、『キリストのからだ』をいただくということ、すなわち、キリストによる私たちのからだの変容を前もって味わっているということなのです。(同上)

世の終わりに今の体が「霊のからだ」に変えられるなら、この世の体はどう考えるべきでしょうか？聖パウロは「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってください。神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」(コリント六・19)。そして、「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか」(同上六・15)。または、「主に結び付く者は主と一つの霊となるのです」(同上六・17)。

こういうふうに考えると肉体は霊魂と同じように大切だということになります。人間のすべての行為は肉体で行います。肉体なし

には何も行うことはできません。人間は体で神の掟を守り、行動することが出来るのです。霊魂と肉体が同時に神のみ旨を行うなら、全身全霊で「聖性」の恵みを頂くことになるのです。聖人は全身全霊で神に親しみ、神の「聖性」を味わっていたので、亡くなった後でも聖人の肉体は聖なる遺物と考え、大切にされているのです。

人間の聖性は、霊だけでなく体にもあるのです。ですから、聖パウロが「だから、自分の体で神の栄光を現わしなさい」(同上六・20)と命じているように、私たちは自分自身のからだの聖性にも配慮しなくてはなりません。その配慮とは、単にからだの清潔や健康を保つことではありません。身体を使って祈り、考え、黙想し、神との関わりを深め、愛し神に生きることによって、聖なる神を身に帯びることなのです。聖人でない我われ普通の人間でも洗礼の恵みをいただいたなら、その体はもはや聖霊の神殿となります。それゆえ葬儀の時には、遺体やお骨を聖堂の祭壇(イエス様の墓の象徴)の前に置き、主イエスと共に復活し、永遠のいのちにいたるようにと祈ります。こうして、教会は「肉体の聖性」が亡くなった人の体、遺体や遺骨にもおよんでおり、それらも大切に扱わなければならないことを強調しているのです。

ところで、沖縄では戦争犠牲者の遺骨を拾い集めて丁寧に遺族に返す「沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマファヤー」」活動が行われています。信条の違いを超えて、多くの皆さんが協力しています。こうした活動は、人としての尊厳をとうとぶ人類共通の心情を表現すると同時に、「肉体の聖性」の教えにも通じる大切な行いです。ところが最近、まだ多くの戦争犠牲者の遺骨が眠る場所から土砂を獲って、新しい基地をつくるための埋め立てに使用しようとする計画が持ち上がっています。これは、戦争による犠牲者をさらに犠牲にして戦争に備える行為であり、遺骨にも及ぶ人間の尊厳と聖性に対するひどいさげすみです。それはまた、そのご遺族にとっても、これは耐え難いほど辛いことです。霊性豊かな沖縄の皆さんはこのような行為を決して許すことができません。人間の尊厳をとうとぶすべての善意の人びとと手をたずさえて、カトリック教会の信条のあらわれとして、すべての人の遺体や遺骨がひとしく丁寧に扱われ、その眠る場にも敬意が払われるよう努めましょう。そうすることによって、私たちの信仰の原点であり頂点である主イエスの復活を信じ、復活した主が与える永遠のいのちへの希望のうちに、主とともに生きていくことを証しましょう。

復活祭、おめでとうございます。復活されたイエスの祝福が皆さんの心身と共にありますように。

“ Your Bodies are Members of Christ Himself ”

(I Corinthians 6:15)

Brothers and Sisters of Naha Diocese,

Happy Easter! Special joyful greetings to all who have received the Sacraments of Initiation: Baptism, Confirmation and Holy Eucharist during the Easter Triduum. By welcoming new brothers and sisters to the faith community of Naha Diocese, our parishes will receive many blessings from the Lord and from our new members. My heartfelt congratulations to all.

One of the more difficult aspects of the resurrection to understand is from the words that we say in the Profession of Faith; namely, that we believe in the “resurrection of the body”. What does this mean? According to the Paulist Sisters series on the Catechism, “Let’s Read the Catechism” when “a person dies their soul goes to the Lord to await the day when it will be rejoined to the body. Through the almighty power of God Himself, and through the power of Jesus resurrection, our souls (at the end of time) will be rejoined to our own immortal bodies again.” In other words, we will live eternally with an immortal body much like the resurrected body of Jesus.

“When we consider one of the resurrection appearances of Jesus from the Scriptures, Thomas who did not believe in the resurrection of Jesus is told, ‘Look at my hands and feet. It is truly me.’ The body that Jesus showed to Thomas was his resurrected body with the wounds that he received from being nailed to the cross. In this way, through Jesus, all human beings will be resurrected with their present bodies, but the bodies will be changed into a glorious ‘spiritual body’. This ‘way of being resurrected’ is beyond our human comprehension, and can only be grasped through faith. However, when we participate in the Mass and receive the ‘Body of Christ’ this gives us a foretaste of the changes that our bodies will undergo through Christ.” (Let’s Read the Catechism).

If our present bodies will at the end of time be changed into a “spiritual body,” how should we treat the bodies that we have now? St. Paul says, “Do you not know that your body is a temple of the Holy Spirit who is within you, whom you have [received as a gift] from God, and that you are not your own [property]?” (I Corinthians 6:19). And, “Do you not know that your bodies are members of Christ himself?” (Ibid 6:15). He also said, “Whoever is united with the Lord is one with him in spirit.” (Ibid 6:17).

With this understanding of Scripture, it is certain that both our bodies and our souls are of importance. All the actions that we do are done with the body. Without the body we cannot put our faith into practice. If our souls and our bodies are in unison and follow the Will of God, we can partake in the grace of the “holiness” of God. A saint is a person who with their whole body and soul loves the Lord above all else. Since this love enables them to taste “holiness” while alive, even after they die, their holy bodies are considered relics and are given due respect.

Every baptized person has the right to have their consecrated body or ashes placed before the altar at the church during their funeral Mass. The altar is a symbol of the tomb of Christ, and at the funeral Mass, the consecrated body is offered to the Lord in the hope of that person’s glorious resurrection from the dead. The church strongly insists that the consecrated bodies or ashes of every Christian should be treated with due respect and reverence.

St. Paul says, “Therefore honor God with your bodies.” (Ibid 6:20). For this reason, we should seriously consider the holiness of our bodies. This consideration is not only for the cleanliness or health of the body. It is with the body that we pray, think, reflect, deepen our relationship with God, love, experience God’s grace, and can take within our person the Lord himself in Holy Communion. Everyone who has received baptism has been consecrated to the Lord in body and soul. We have all become a “temple of the Holy Spirit.”

When we think of the resurrection, it is important that we think about letting the Lord work in us while we are alive to make us holy in body and soul. In this way, when the time comes for us to go out and meet the Lord, either through our own death, or at the end of time, we will be ready to be welcomed into the heavenly kingdom.

Have a festive Easter and may the Good Lord bless all of you with good health and happiness during the Easter Season.



復活された主にあって、 光の子として歩みましょう。

フランシス・ティエン神父

安里教会 主任司祭



光の子として歩みなさい」(エフェソ五・8)と復活の神髄をとつても美しく言い表しています。私たちの以前は暗闇でした。今、主に結ばれた。主の子となりました。だから、私たちは、暗闇の子としてではなく、光の子として生きましょう。それは洗礼を受けた私たちの使命であり生き方です。私たちは皆、主の光の子なのです。

「主にあつて光の子」

い火の祝福です。パスカルキャンドル(復活のろうそく)は、闇を追い払うために燃え上がるキリストのシンボルです。イエスは「私は世の光である。私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネ八・12)と言われました。イエスは世の光であり、私たちの光です。まことの光であるイエスに従っている私たちは永遠の命の光を見つけたのです。

イエスは暗闇の誘惑におちいりやすい私たちをよくご存じなので、私たちに「光は、今しばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。……光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」(ヨハネ十二・35・36)と「光である私を信じなさい」とはつきり言われました。私たちが光の子であるならば、私たちは主のうちにいることができます。私たちは光であるキリストを信じることで光の子になることができるのです。

初代教会は素晴らしいイメー

太陽である主の光です。主の光がなければ、私たちには光がありません。私たちは主の光の代理者なのです。私たちは謙遜な月です。月が太陽に近づくほど光はより明るく強くなります。同じように、私たちがイエスに近づくほど、私たちの光は明るくなり、私たちはキリストのようになり、自分の信仰生活の中で私たちはこの現実をよく体験していると思います。

聖パウロにとつて「主にあつて、光の子として生きる」というこの表現は、キリストの弟子である私たちが存在し、超自然的に生きるために、キリストとの関係において歩まねばならないということです。それは私たちがキリストと共に生きているという意味であり、父である神様、そして復活された主の賜物です。

キリストこそ、洗礼を受けた私たちが彼の一部分になるよう招いておられるので、私たちは今キリストと深くつながっています。イエスは言われました。「わたしはまことのぶどうの木、あなた方はその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなた方は何もできないからである」(ヨハネ十五・5)。

洗礼は私たちが主の光の中にあることの始まりです。私たちは

病人の回復なる聖母マリア安里教会では年二回、待降節と四旬節に黙想会があります。特に、復活の神秘は私たちの信仰の基盤であり、復活節は教会のカレンダールの中で最も長く大切な節なのです。復活節の神秘について黙想して、祈り集うことはとても必要だと思えます。

聖パウロは「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。」

とはどういう意味でしょうか。最初に「光」という言葉をよく考えてみましょう。

復活節は降誕節のように光のイルミネーションは飾らないのに「光の節」と呼ばれます。復活の聖なる徹夜際の式典は暗闇の中で始まります。第一部の光の祭儀は、復活の際に暗闇を払いのけるイエスを象徴する新しい

初代教会は素晴らしいイメージを持っていました。それは、イエスは太陽であり、人間は月であるということです。月はそれ自身が光ではなく、太陽の下に光となることができるのです。私たちも月のように、太陽であるイエスの光をうけて地上に当てています。私たちの光は

はキリストの光の中で成長するように、信仰によって洗礼を祝わなければなりません。毎年私たちは洗礼名の記念日を祝い、復活の聖なる徹夜際に洗礼の約束を更新します。その時、私たちは主の光の内に留まっているでしょうか、それとも暗闇の内に留まっているのでしょうか、もう一度自分自身の心に問いかけてみましょう。

主にあつて光の子としてある

ということは、その考えと行動がキリストの生き方に倣うという意味です。私たちはキリストの中にいるなら、私たちの考えや行動はキリストの生涯を反映していなければなりません。このことで、私は典礼聖歌三九〇番「キリストのように考え」という歌を思い出します。私はこの歌が大好きなので、祈りや会議の時にこの歌を始め、説教の時にも何回もこの歌について話しているのです。今、祈る心を込めて一緒に歌いましょう。

「キリストのように考え、キリストのように話し、キリストのように愛そう……」。

復活された主よ、あなたの光の内に、光の子として私たちがあなたのため、そして周りの人々のために輝かしいうそくになりますように！

ご復活、おめでとうございます。

2021年3月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2021年3月2日(火) 9:30～12:00 開催場所：カトリック石川聖ヨセフ教会

※会議に先立ち、聖ヨセフ年開幕ミサが捧げられ、会議を「聖ヨセフの連願」でもって始めた。

1. 報告及び連絡事項：司会・ピーター・チェ神父

- ・前回(2月会議)の議事録の確認－津波古。
- ・2月15日～19日に開催された Zoomによる定例司教総会について、ウェイン司教から特に重要なポイントを要約して報告が行われた。個別案件については審議事項で取り扱われる。
- ・2月22日～25日にかけて与那原祈りの家で行われたカプチン会の日本地区総会について、デニス神父から報告が行われた。地区長選挙の結果、マキシム神父が新しい地区長に選出され、小禄に赴任することが伝えられ、議長を務めたウェイン司教は前地区長のデニス神父に謝意を述べ、新しい地区長による船出を迎えたカプチン会のために引き続きお祈り下さるよう要請された。
- ・3教区合同黙想会について、ウェイン司教から報告が行われた。三教区での話し合いで今年も延期することが決まったので、今年も昨年同様教区内の司祭・助祭だけの研修会を計画したい旨提案、了承された。なお、研修内容等についての意見があれば申し出るよう要請がなされた。
- ・10月18日～21日にかけて予定されている長崎教会管区の司祭集会について、引き続き事務局長会で検討を重ねているが、現状では開催できる状況にないと判断し、代替案として Zoomによる研修会か、更なる延期を司教団に要請していることが報告された。
- ・その他
- ・保良教会の改修工事の進捗状況について報告が行われた。フェンスや門扉の設置などの外構工事はかなり進んでいるが、建物の内部の改修はまだ見積の調整段階で、何とか3月中に完了し、4月からはシスター達が住めるよう進行中であることが報告された。
- ・「沖縄宗教者の会」が辺野古新基地建設に反対する様々な団体と連携してとくに今力を入れて訴えている活動について報告と協力要請がなされた。辺野古新基地建設の埋め立てに戦争犠牲者の遺骨や遺品の混じる本島南部の激戦地跡の土砂を使用する計画に反対するこの活動は、特に戦争犠牲者の霊を弔う宗教者の優先課題と捉え、カトリック教会にも賛意賛同の要請が呼びかけられていることが伝えられ、沖縄に在る一宗教団体として可能な協力が求められた。

2. 審議事項

- ・教皇フランシスコによって定められた「ヨゼフ年」について 先ずウェイン司教から先の司教会議で決定された「聖ヨセフの連願」と「聖ヨゼフの祈り」を各小教区で用いて聖ヨセフに対する信仰の理解を深め、その霊性を広めるよう依頼がなされた。その他の那覇教区での取り組みについては、ブイ神父から様々な提案がなされ、特に聖ヨセフにちなんだ巡礼教会の指定やこの期間に付与される全免償の詳細等について検討したが、免償については司教権限に委ねられていることからウェイン司教に一任されることとした。
- ・聖週間(3/28～4/4)の典礼について検討した。コロナ新規感染者数は徐々に減少傾向にあるが、感染リスクの状況は変わらないため、今後も細心の注意を必要としていることをふまえ、これまで同様の防止対策の徹底と簡略化を条件にすべての典礼を公開で行い、詩篇や復活の賛歌など典礼上重要な歌は歌うことが出来ることを確認した。各司祭は、早めの時間帯にできるだけ短時間で実施するよう配慮し、復活祭パーティーなどの会食は行わないよう強く求められた。また、聖香油のミサについては、特に宮古・石垣の司祭への配慮と感染防止の観点、更にローマの指針に基づき、今回は特別に復活後の火曜日の9時半から安里教会にて執り行うこととし、終了後に4月の司祭・助祭拡大会議を開催することとした。
- ・ニューヨークのカプチン会宣教支援団体からのミサ依頼が昨年初めから届いていないことがウェイン司教から報告された。そのため定期的にこのミサ依頼の献金を受領することが出来なくなったことを補うため、これまでのミサ依頼献金の取り扱いを以前の仕方に戻し、日に一件のミサ依頼献金はそれを受けた司祭に帰属するものとし、一日一万円を上回る分や冠婚葬祭に対する献金については、小教区会計に帰属させるよう指示した。なお、修道会司祭はこれに加えて所属する会の定めに従うよう求めた。
- ・前述の司教総会の決議事項の一つである朗読奉仕者と祭壇奉仕者の奉仕職に女性を加えることについてウェイン司教から報告がなされた。これまで教会法上認められていなかったこれらの事について、新旧の条文を比較しながら説明がなされ、これまでもなされてきたことではあるが今後も性差別なく信徒の典礼奉仕がなされるよう配慮が求められた。また、葬送儀礼などの際、信徒がいない場合のキリスト者以外の人が朗読などの奉仕をすることについては、可

能な限り信徒を起用し、特にミサにおける奉仕は信徒に限る原則を確認しつつも、その時々^のの宣教司牧上の配慮による判断を尊重することも認めた。すべての典礼が信仰を前提になされることを尊重しつつも、福音宣教に資する努力が疎かにならないよう注意を払いながら、特に福音宣教の大きな機会である冠婚葬祭に臨むよう要請された。

- ・ 3月5日、四旬節第2金曜日に設けられた、「性虐待被害者のための祈りと償いの日」のミサについて、ウェイン司教から各小教区でその意向に沿ってその日のミサが捧げられるよう、再度要請が行われた。
- ・ 3月25日、「お告げの祭日」に定められている「いのちを守る日」のミサについても、再度ウェイン司教から要請が行われた。その日のミサは「ぬちどう宝」の観点から「すべてのいのちの尊重」の意向で捧げるよう指示がなされた。
- ・ その他
- ・ 時間の都合で前回から持ち越しとなった拡大司祭助祭会議の持ち方や研修会などについての話し合いは更に次回以降に持ち越しとする。
- ・ 次回、司祭・助祭拡大会議は、2021年4月6日(火)午前9時半からの聖香油ミサ後に安里教会にて開催する。

2021年3月15日

記録: 津波古 聡

承認: ウェイン・フランシス・バートン司教

イエスに倣い、伝えたい



坂上 彰 神父

皆さま、はじめまして。

そして「はいさいぐすーよー、ちゅううがなびら」

これまでも「さいたま教区 平和を祈る沖縄ツアー」の引率などで度々訪れていましたが、この度、押川司教様やウェイン司教様をはじめ司牧者の皆さまのご厚意により那覇教区で働かせていただくことになりました、さいたま

教区^{さかがみあきら}の坂上彰と申します。

1960年、東京小平市^{こたいら}生まれの60歳ですが、長寿県の沖縄においては若造(青年?)の部類に入るかもしれません。今回、貴重な誌面をお借りして「イエスの何を伝えたいか」「イエスの何処に魅かれ、倣いたいか」をお伝えする事で、私のプロフィールに代えさせて頂きたいと思います。

御父の、「エジプトの地で苦しむ民の姿をその目で見、嘆き祈る声を直接その耳で聞き、おん自ら下って行き民を救った」(出エジプト3・8)というDNAを受け継いだイエスもまた、「弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう」(アモス書8・6)とする当時のユダヤにあって、人々から後ろ指を指され、唾を吐き掛けられ、石を投げつけられ、社会の片隅でひっそりと息を殺して生きることを余儀なくされていた人々の元に駆け寄り、寄り添い、肩を抱き、共に涙し、彼らを救いました。会堂における「※捕らわれている人に解放があると告げ、打ちのめされている人を自由の身にして」(ルカ4・18)は、正にイエスが告げた「解放宣言」であり、「※抑圧にめげない人は神からの力がある。その人は地を受け継ぐ。解放に飢え渴いている人は神からの力がある。その人は満たされる」(マタイ5・5,6)「※労働で疲れ果てた者、重荷を背負う者は誰でも私の所に来なさい。私が安らぎを

与えよう」(同11・28)「※今、苦しみに泣き叫んでいる人達は神からの力がある。あなた達は笑えるようになる」(ルカ6・21)は、現代風に言えば「基本的人権、幸福追求権、生存権の回復」です。私は、人類の歴史上、初めて民主主義の尊さ、自由の大切さを説いたイエスに倣い、これを伝えたいと思い、これまでハンセン病の回復者の皆さんの人間回復や、部落差別問題、サツマ世から始まりヤマト世、いくさ世を経て今も続く沖縄の歴史に取り組んできました。

また、「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事からで、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない」(『現代世界憲章』南山大学監修)という教えを胸に、主が身命を賭してまで望み訴えた「剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザヤ2・4)「狼は子羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛も等しく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる」(同11・6-8)社会の実現のために、皆さんとご一緒に手を携え協力しながら歩んでいきたいと思っています。

結びに、「沖縄の心とは何か?」と問われた故・西銘順治は「ヤマトンチュになりたくてもなり切れない心」と表現したそうですが、私はどんなに逆立ちしてもヤマトの人間ですから一生かかっても「ウチナンチュになりたくてもなり切れない心」しか持つことは出来ません。それでも、いつの日か「島人」になりたいと思っています。

これからも、どうぞよろしくお願い致します。

※『小さくされた人々のための福音』(本田哲郎訳)より

洗礼おめでとうございます 与那原教会

2021年3月14日 ヨハネ 糸 数 礼
2021年3月23日 ヨセフ 佐久田 盛雄

私たちカトリックコザ聖家族教会では創立五十周年記念のDVD制作に取り組んでいる。五十周年を祝うにあたって、記念誌の制作という声もあったが、DVDの制作をと手を挙げたのが大城庸秀氏であった。写真が趣味で五十周年の記念写真展を企画していた彼はカトリックコザ教会の歴史を映像で残したいとの強い思いがあったのだと思われる。これはぎりぎりのタイミングだった。教会創立当時の人たちが、新垣宗堅助祭夫婦をはじめとして数人しか残っていない現実。大城さん自身の写真があと数年もすると四散してしまう恐れが無かつたわけではないからだ。

そうはいっても私たちにはDVDを作るノウハウはない。白羽の矢を立てたのは琉球朝日放送の元報道制作局長の具志堅勝也氏。彼は平和委員会主催の講演会の講師に三度もなつてもらっている縁がある。彼は復帰時に密使として、佐藤栄作政権下で活躍した若泉敬氏を扱ったドキュメンタリーフィルム、「他策ナカリシヲ信ゼム」でギャラクシー賞を取った人だ。そのうえ定年退職後は琉球大学や沖縄大学でメディア・リテラシー等のクラスを持っていて忙しいときている。しかしダメもとで私たちの編集作業を依頼した。案に相違して、彼は引き受けてくれたのだ。彼にはほんとうに感謝あるのみ。

DVDのタイトルは「私たちは一つの家族」で、副タイトルは、「愛における一致」に決まった。このタイトルは当然「聖家族」を念頭に置いて付けられものである。私たちの教会は、聖家族を範とし、聖家族に倣う教会であるからだ。クリスマスの際に来る日曜日は聖家族の祝日だ。その日はカトリックコザ教会にとって公式の司教訪問日に当たる。昨年の聖家族の日の説教で、ウエイン司教様は次のように語られた。「聖

たて軸よこ軸

聖家族について

創立50周年記念DVD制作の過程で思ったこと

コザ教会 稲福 捷夫

苦勞していた。「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」ではじまる、マタイ福音書の冒頭一章1節から17節までの、カタカナ名前の羅列が永遠に続く「あれ」である。羅列と書いたが、すくなくとも、当時の私にはそれこそ、そのように思われた。聖書は初めから読むものと思い込んでいた真面目な(?)高校生には高いハードルだった。何度も弾き飛ばされた記憶がある。そしてどうにかイエスキリスト

の系図を読み終えた先の失望感。16節を読んだ時には「騙された」と思ったものである。16節にはこうある。「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアか

らメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった」のである。何のことはない、自分か苦勞して読み終えた系図はイエス様とは血のつながりはないヨセフの系図だと知らされたからである。

東京での学生の頃に見た映画がある。

この映画で初めてカトリックを意識させられたのである。イエスの生涯を扱った映画ではダントツに印象に残っている。イタリアの映画監督パゾリーニの「奇跡の丘」である。原題は確か「マタイによる福音書」であった。コミュニティで無神論者として知られるパゾ

リーニがマタイ福音書を映画化するというところで、物議をかもしたと聞いている。しかし結果はマタイ福音書を忠実に再現したものになっていた。この映画の冒頭、妊娠をしているマリアを見て、無言で去っていく足の重いヨセフ。そのヨセフを、言い訳もせず、無言で見送るマリアの悲しげな表情。天使のお告げを受けて、それこそ足早に駆け戻るヨセフ。これらのシーンはすべて、セリフなしであった。職業俳優を一切使わず、素人だけの新鮮な演技が光っていた。市井の臣を使うことによってイエスの時代が画面を通して伝わってきた。結果的に、この作品は国際カトリック映画事務局賞を受賞した。偏見にとらわれず、作品そのものを評価したカトリックに当時の私は好印象を持ったのである。

エレミア神父の思い出はたくさんある。日本文化に興味を持ち、真摯に学ぼうとしていた。今でも彼が毛筆で認めた年賀状は大切にしている。次の言葉で締めくくりたいと思う。

みんながつてみんないい

(金子みすゞ 詩)

話をDVDに戻すが、この原稿が出るころには皆さんのお手元に届くものと確信している。

#余談になるが、映画「奇跡の丘」はアマゾンで入手可能です。

教区 NEWS 教会

地域貢献活動を行っています

真栄原教会

真栄原教会では、地域貢献活動の一環として、昨年十月から宜野湾市社会協議会のフードドライブ運動に協力しています。この運動は「ちゅいしーじー（助け合い）の心」が合言葉の食料支援です。

私達は、各家庭から食料品を持ち寄り、同協議会に月一回のペースで届けています。この日は、ヨアキム神父様と女性の会担当者がお届けしました。

(千村次生)



ご案内

精神病者監護法の落とし子

安里教会 松本 淳

聞きなれない言葉ですが、昔々「私宅監置」という制度がありました。家族に精神障害者が出ると、世間体が恥ずかしいとか、迷惑がかかるなどの理由で、家の裏座に囲った座敷牢や屋敷の片隅にこしらえた隔離小屋に閉じこめ、社会から見えなくしたのです。小屋は一坪ほどで密閉に近く、ほとんど光も入らず、食事は命をつなぐだけのわずかな物が小さな格子窓から差し入れられました。部屋にトイレはなく垂れ流し、まるで家畜同然の扱いでした。

これは、先日試写会で見た映画『夜明け前のうた』（原義和監督）が写真と証言で炙り出した衝撃の実話です。明治時代の1900年に公布された「精神病者監護法」に基づく「私宅監置」という制度がもたらした残酷物語です。この悪法は、本土では終戦直後の1950年に廃止されたが、沖縄では戦後の米軍統治時代を含め1972年の日本復帰まで続きました。

「チムグリサ」が身上的沖縄社会。おそらく身近な関係者は憐憫の情を抱きつつも、耐えがたきを耐えて黙認し、容認したのでしょう。患者は治療よりも治安の対象とされ、人権がないがしろにされた悲しい時代でした。つらつら思うに、政治の基本は人権を大切にすることです。また人権意識と言うものは、わが身に置き換えて物事を考えることから生まれるものです。

このドキュメンタリー映画は、私たちに「人間の尊厳とは何ですか」と問いかけます。より多くの方々にご覧いただきたいですね。

※ 4月3日から桜坂劇場で上映

御礼

金祝(那覇教区)・生年祝い(石垣市)で 神に感謝

石垣教会 玉城功一・文子

今年2021年2月11日の「那覇教区の日」に、ウェイン司教様から「金祝」(結婚50年)の頌状と記念品を拝領しました。例年は教区センターで県内各小教区から一堂に会して行われていましたが、今年はコロナウイルスの流行で、全小教区で時間を合わせ(午前10時)同時に行われたようです。

石垣教会では当日は主日でないのに多数参加いただき、修道院の用件で沖縄本島から来ておられた旧職員のSr.仲大底、Sr.レミ様も参加されて、感謝いっぱいでした。

石垣市では、毎年旧正月に市の主催で、85歳、97歳の合同生年祝いの式典および慶祝訪問を行います。しかし、今年は、コロナ禍のため9月に延期するので、各自で市役所に来て、頌状と記念品を受け取るようにとの通知がありました。2人で行ったら、介護長寿課の職員全員が起立し、拍手で祝福してくださったのには感動し、感謝しました。担当職員の話では、夫妻そろって拝領に来られたのは少ないとのことでした。

80歳を過ぎると2人とも病院通いが多くなり、外出のときは、杖を使うようになりました。後期高齢者として、入院毎に栄養指導を受けたり、食品栄養成分表を取り寄せたりして、老後の健康管理に役立てています。

コロナ流行の渦中であって、最大の恵みは、毎朝夕の祈りに、①「主の祈り」②「アベマリアの祈り」③「各自の霊名の聖人への祈り」④「殉教者石垣永将兄弟への祈り」の四つの祈りを唱えることができ、その存在を身近に実感する体験ができたことです。

「カトリック名護教会創立60周年・ 献堂5周年記念感謝ミサ」の お知らせ

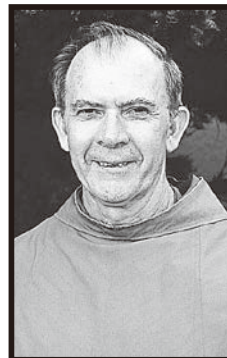
カトリック名護教会は、2015年5月に皆様のたくさんのお祈りとご協力によって新しい聖堂が与えられ、献堂式が盛大に行われました。そして昨年は教会創立60周年を迎え、献堂5周年と合わせて記念感謝ミサを予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大のために延期を余儀なくされました。そのため、この度あらためて創立60周年・献堂5周年記念感謝ミサを5月9日(日)にウェイン司教様司式によって行うことになりました。

つきましては本来であれば、皆様をご招待してともに喜びを分かち合いたいところですが、感染拡大に配慮し、やむをえず名護教会のみでの記念感謝ミサとさせていただきます。うみのほしなるマリア様とヨセフ様のご保護を願います。那覇教区の皆様、どうぞお心を合わせてお祈りください。

カトリック名護教会 主任司祭 ポスコ・ティン
信徒一同

訃報

ビンセント・ラチェンドロ神父
O.F.M.Conv.
2021年3月27日
アメリカにて帰天、享年85歳。



ビンセント神父様の司祭生活は、奄美で宣教、長崎、マニラ、沖縄那覇教区と、生涯のほとんどを日本での宣教活動に費やされました。神様の豊かな恵みが神父様に注がれますようお祈りいたします。

「パードレ・ピオの集い」開催

日 時：2021年4月20日(火) 午前10時～午後2時
場 所：カトリック普天間教会
指導司祭：ペトロ・ヴォン・エッセン神父(カプチン会)
※マスクの着用をお願いします。飲食はできませんので、各自で飲み物、軽食(必要に応じて)をご準備ください。
連絡係：屋宜留美子(石川教会) 090-6857-7321
比嘉須賀子(首里教会) 070-5813-2557
相談窓口：098-863-2020(火・水・木 13:00～17:00)

訃報

◆宮古島平良教会
ヨハネ 新里 一雄 様
二〇二一年三月二十三日帰天 享年九十一歳

◆与那原教会
ミカエル 山内 清三 様
二〇二一年三月五日帰天 享年五十八歳

◆アガタ 波照間千代子 様
二〇二一年三月九日帰天 享年八十七歳

◆開南教会
アントニオ 多嘉良 勲 様
二〇二一年三月五日帰天 享年六十七歳

◆名護教会
ドミニコ 清村 英夫 様
二〇二一年三月十日帰天 享年八十九歳

◆カタリナ 嶋 千ヨ 様
二〇二一年三月十九日帰天 享年九十八歳

◆安里教会
アシジのフランシスコ 砂川 正夫 様
二〇二一年三月二十八日帰天 享年八十二歳

NPO 法人ぶどう園の会



訪問看護ステーション クララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



葬祭の 「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>

E-mail: yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひ が たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく

☎098-853-1059

